

三種町堂の下遺跡における縄文時代の石器集積遺構

磯村 亨*¹・吉川耕太郎*²

はじめに

秋田県を含む東北地方日本海沿岸は列島でも有数の珪質頁岩地帯である。珪質頁岩は新第三紀中新世女川層に由来する堆積岩であり、火山岩と違って面的な分布傾向を示すが、必ずしも石器原料に適した石質がどこにでも分布しているというような状態ではない。本県では三種町琴丘地区で良質な珪質頁岩原産地が知られており、旧石器時代から縄文時代を通して利用されていたことが判明している。

筆者のうち吉川は、当地域の石材資源開発行動について、後期旧石器時代前半期と縄文時代前期のあり方を比較検討したことがある（吉川 2008）。執筆の契機となったのは、縄文時代前期から中期にかけての珪質頁岩採掘址群である三種町上岩川遺跡群の発掘調査であった（秋田県教育委員会 2008b）。拙稿では、とくに縄文時代前期における石槍等の製作を軸に据えた石器原料の採掘・製作・消費といった一連の流れと組織的開発のあり方を推測した。今回、ここに紹介するのは堂の下遺跡（秋田県教委 2002）の縄文時代前期に帰属すると考えられる石器集積遺構 S X 292 である。本遺跡は地理的に、原産地である珪質頁岩採掘址（上岩川遺跡群）と消費地である縄文前期集落（狐森遺跡・兵ヶ沢遺跡等）が立地する海岸段丘との中間の丘陵上に位置する。小稿では堂の下遺跡の石器集積遺構の概要を追加報告したうえでその性格を検討し、当該期における石材資源と縄文人との関わりを探る上で重要な材料を提供したい。

なお、1～4（1）までを磯村が、その他を吉川が分担して執筆し、編集は吉川が行った。

1 遺跡の立地概要

遺跡のある旧八郎潟東岸地域は、出羽丘陵地の北寄りに位置し、東は七座山地・房住山地、北は白神山地、西は日本海に面している。遺跡の東側で南北にそびえる房住山と北の七座山地を結ぶ山頂部は、標高 300～400 m の高位侵食小起伏面群が発達している。また、この丘陵頂部の東側で山地に接する地形は急斜面となっており、西側では低位段丘面が平野面とともに低地を形成し、山地とそれに続く丘陵地、台地、低地の三段化した地形が規則正しく連なっ



写真 1 遺跡航空写真

ている。平野面を形成する水系は、遺跡から北に 7.5km ほどを西流するこの地区最大の三種川の他は、遺跡周辺で鹿渡川や鯉川が八郎潟干拓地の承水路に注ぎ込んでいるに過ぎない。周辺の地質は下位から新第三紀中新世の小谷沢層、女川層、船川層、天徳寺層、鮮新世の笹岡層、第四紀更新世の潟西

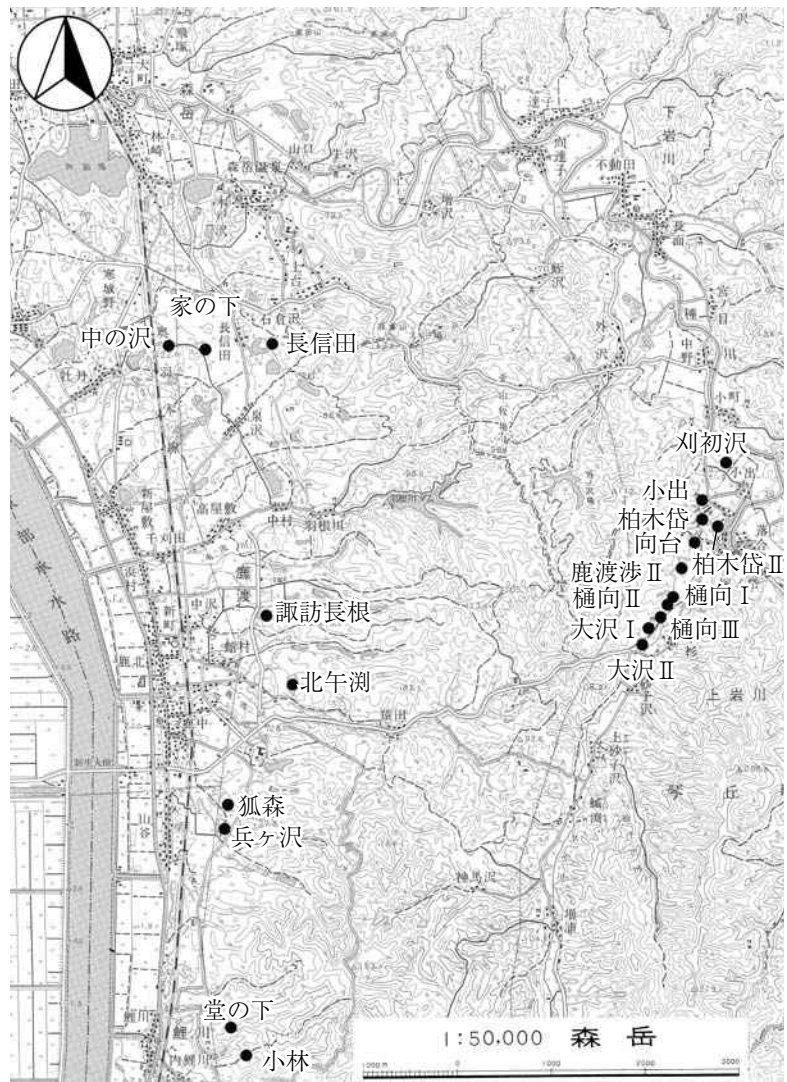
*¹ 秋田県埋蔵文化財センター学芸主事 *² 秋田県埋蔵文化財センター文化財主任

層、段丘堆積物、完新世の段丘堆積物、沖積低地堆積物で構成されている。山地から湖岸に向かって地質時代の古い地層から若い地層が順に重なっているが、地層が褶曲しているため、南北の褶曲軸に沿って同一層が繰り返し露出している。このため湖岸に近い丘陵地の一部では、船川層の泥岩、女川層の珪質頁岩がみられる。また、鹿渡丘陵地、森山高岳山山地にそれぞれ火山岩類層がみられ、遺跡の南北にそれぞれ分布する。鹿渡丘陵地にみられる火山岩類は馬ノ松火山岩類層と呼ばれており、岩種は石英安山岩、角閃石安山岩など多種にわたる。森山、高岳山では石英安山岩がみられる。堂の下遺跡から出土した石器の原材は潟西層や段丘礫層に角～円礫の状態が多く包含されている。

2 周辺の縄文時代遺跡

周辺で特筆すべき縄文時代前期の遺跡として北方2kmの地点に位置する狐森遺跡（秋田県教委2004b）と兵ヶ沢遺跡（秋田県教委2000）および北東6kmの上岩川遺跡群があげられる。以下、それぞれの遺跡について概観する（第1図）。

狐森遺跡は、縄文時代前期を中心とした遺跡であり、掘立柱建物跡12棟、竪穴住居跡9軒、フラスコ状土坑30基、捨て場1か所などからなる集落遺跡である。遺跡は南北を沢で開析され八郎潟に向かって半島状に突き出した段丘上に立地し、平坦面に竪穴住居跡、掘立柱建物跡群、縁辺部にフラスコ状土坑、そして南側斜面に捨て場がある。竪穴住居跡は、中期後半の複式炉をもつ1軒を除き、概ね前期後半から中期前半に帰属するもので、調査区北側で7軒、南



第1図 周辺の縄文時代遺跡分布図

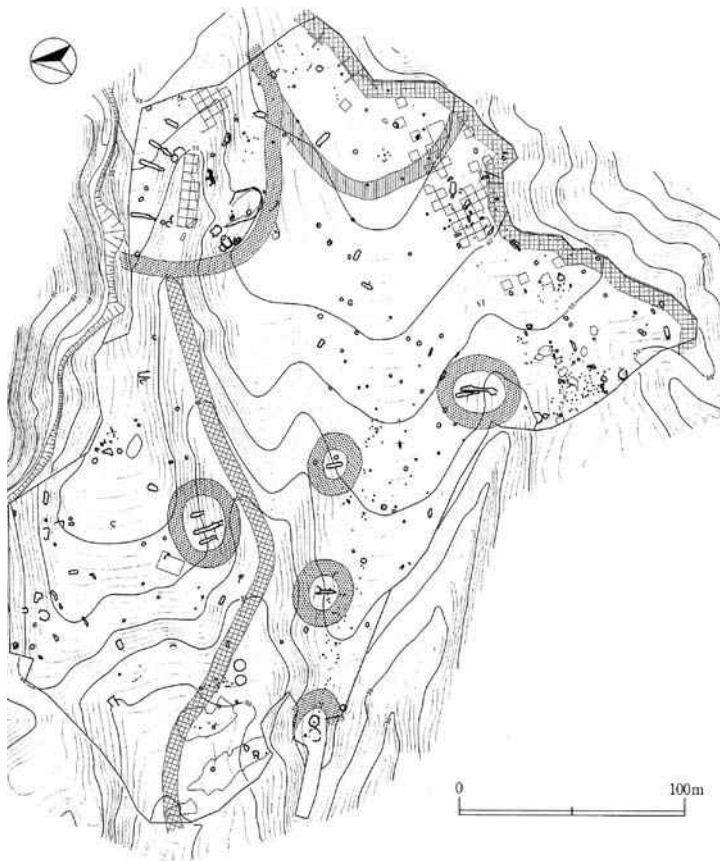
側で2軒検出されている。掘立柱建物跡は南側に偏在している。大型の掘立柱建物跡については、狐森遺跡の周辺に点在すると想定される小規模集落の共有施設あるいは共同作業場であったと推測されている。建物柱穴から石器が多く出土するものもあり、地鎮的な意味がこめられた可能性が考えられている。また、捨て場からは、円筒下層a、b式期を中心とする土器や石器・石製品が出土している。石器・石製品は、剥片も含めて218,034点あり、石器の器種別出土量について、同時期の遺跡である協和上ノ山II遺跡（秋田県教委1988）と比較検討されている。上ノ山II遺跡は前期が保有する石器・

石製品が各種揃っているのに対して、狐森遺跡では石錘の出土頻度が極めて高く、該期における八郎潟湖岸の漁撈活動などに遺跡の特徴があると評価されている。剥片等の珪質頁岩は、本稿で扱う石器集積遺構から出土した石器と同じ石質のものが多く、地域的な特色としてあげられる。

狐森遺跡の南側に隣接する兵ヶ沢遺跡は、前期中葉の竪穴住居跡2軒からなる集落跡である。捨て場は検出されていないが、狐森遺跡と同時期の小規模集落として捉えられ、狐森遺跡の掘立柱建物を共有していた可能性もある。

北側に隣接する金仏遺跡も、竪穴住居跡や土坑墓からなる縄文前期の小規模集落である。

上岩川遺跡群は、鹿渡渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡・樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡で構成されており、縄文時代前～中期の石器集中部、原石採掘址群が多く検出された。とくに樋向Ⅲ遺跡では、長軸8m×短軸3mの範囲から約5,700点の石器が出土し、石槍等の石器製作過程を復元する上で貴重な資料が得られている。



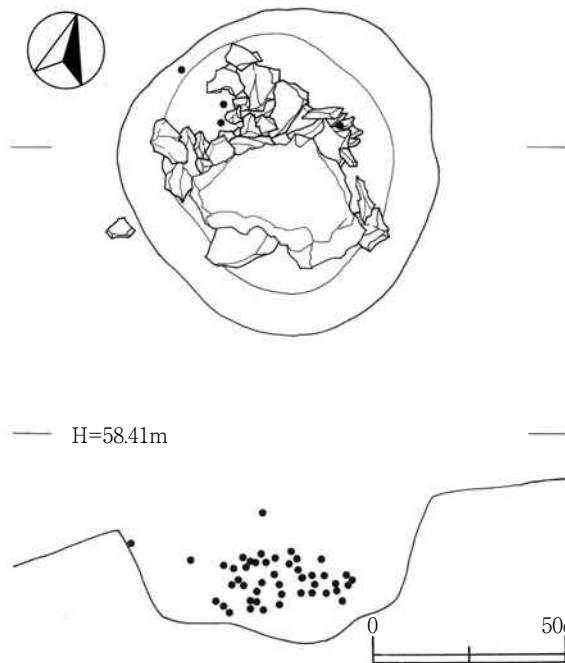
3 堂の下遺跡の概要（第2図）

縄文時代の遺構は、後期の竪穴住居跡が3軒（S I 29・S I 31・S I 436）あり、土器・石器・石製品・土製品等が出土した。このうち、2軒（S I 29・S I 31）は谷底にあり、その

立地の特異性や精緻な刻文のある石棒の出土状況から、祭祀に関連した施設の可能性が指摘されている（秋田県教委前掲）。また、南尾根斜面の落ち際に検出された1軒（S I 436）には炉がなく、多量の土器片や剥片が床面から浮いた状態で流れ込んでいる。周辺に存在する遺物の集中域は、この住居廃絶後に形成されたと考えられる。縄文時代の遺構・遺物は後期中心で、丘陵中腹の緩斜面地に分布する傾向が強い。調査区を開析する幾筋もの沢底と挟在する尾根上の緩斜面地に遺物の分布が集中し、特に南西側のやや広い平坦面（前述の住居を含む）に偏在する傾向が見られる。縄文時代に帰属する遺構外出土遺物の包含層は漸移層～黄褐色粘土層下20cmにまで及んでおり、一見すると旧石器時代の遺物出土状況と見誤るかのようであった。同じような状況は能代市縄手下遺跡（秋田県教委2006c）で指摘されており、本県日本海沿岸部の段丘・丘陵上において黒色土の発達が弱いことと関連するかもしれない。

第2図 遺跡全体図

4 石器集積遺構と出土石器



第3図 SX292



写真2 SX292 石器検出状況

(1) 石器集積遺構S X 292 (第3図・写真2)

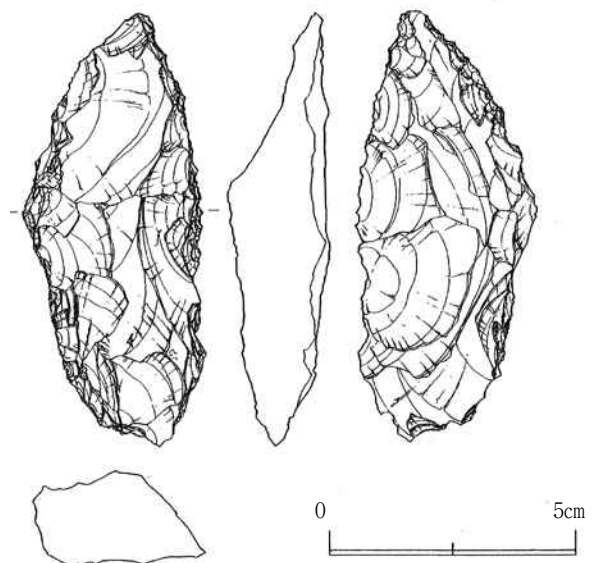
SX292は、発掘調査区の東から西に向かって延びる尾根状の緩斜面地に位置する。本遺構西側の尾根先端部には弥生時代の竪穴住居跡、南北の急斜面地には中世の地下式製炭窯、東側緩斜面の上方には旧石器時代の遺物が出土する区域が広がっている。

本遺構の周辺域では、表土直下から大小の珪質頁岩製剥片が多数出土していた。これらの取り上げの際は出土地点を平面とレベルで記録していた。取り上げを進めるうちに、剥片群の下位に円形の掘り込みが存在することを確認した。当初は、剥片が集中して出土する範囲としての認識で、遺構としての検討が不十分であったことなどから報告書では取り扱わなかった。土坑状の掘り込みは、平面形が直径0.94 mの円形で、深さは推定で42cm以上のものである。遺物の出土状況は、写真2のとおりで、埋土上位程大きな剥片が分布する傾向にある。埋土は黄褐色粘土層（遺跡基本層序第IV層）とほぼ同質の土が埋まっていた。^{註1)}

(2) 出土遺物

当該遺構からは石槍（未製品）1点、石核6点、剥片361点、碎片14点、総重量15.9kgの石器が出土した。すべて珪質頁岩製である。接合資料は寸詰まりの縦長剥片5点が接合する1例のみである。そのため、個体分類は主として原礫面と石質、色調等の観察に基づいて行わざるをえず、その結果、3個体への分類が可能であった（識別有効度B：吉川2003）。うち、1個体は剥片の単独資料、もう1個体は剥片2点のみで、その他の資料とは肉眼観察上、明確に分離できた。よって、本遺構内出土資料はほぼ1個体で構成されていることになる。

当該個体は、礫面が気泡状を呈する特徴的なあ



第4図 石槍未製品

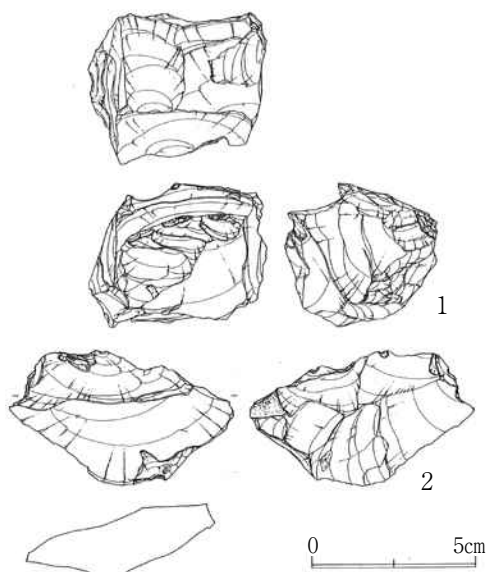
り方を示しており、原礫面の状態から想定される原石の大きさは人頭大以上の円礫である。石質は全体的にざらついており珪化があまり進んでいない。強い風化のため色調は灰黄褐色を呈しているが、比較的良質で珪化の進んだ暗褐色の部分が斑状にある。つぎに出土遺物の概要を器種ごとに説明する。

石槍未製品（第4図）

石器裏面に素材剥片の主要剥離面を残しており、大形部厚の横長剥片を素材としていることがわかる。素材剥片の打面は石器正面の左位に置かれる。調整加工は周辺部から表裏全面に大きく平坦に施された後、石器先端部がより細かく整形され、尖頭部を作出しようとする意図を読み取ることができる。一方、石器基部側は円基となるように加工されている。素材剥片の打瘤部の厚みは平坦剥離をもってしても減ぜられず、最終的に石器左半部は厚みを大きく残したまま、製作が断念されている。

石核（第5図）

1は石核調整が施されず、素材面や原礫面は残されていない。90度打面転位により縦長～横長幅広剥片が連

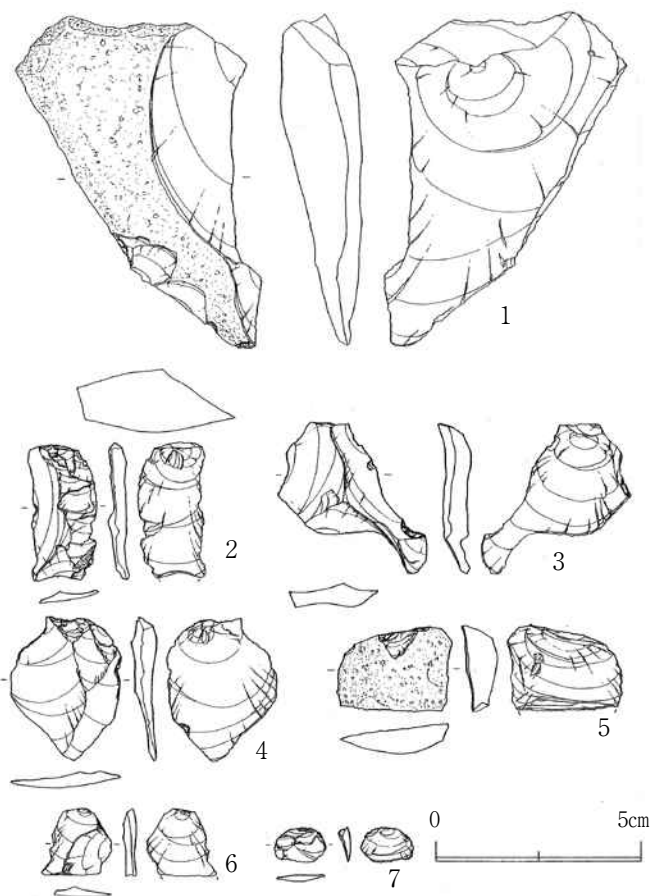


第5図 石核

続的に剥取されている。一見すると礫素材のようでもあるが、本個体は前述のように人頭大以上の巨礫と想定されるため、大形部厚な分割剥片を原料としているのであろう。最終的な形態は賽子状を呈する。剥片を素材とした石核は5点あり、後述する大形剥片がそれらの元となっている。石核になった剥片の主要剥離面側を作業面として横長幅広剥片が数枚剥離されるが、背面側に作業面が及ぶ場合もある（2）。

剥片・碎片（第6図）

1 cm 以上のものを剥片、1 cm 未満のものを碎片とした。剥片は、10 cm 以上の大形剥片（11点：1）、5～10 cm 未満の中形剥片（65点：2～5）、1～5 cm 未満の小形剥片（285点：6・7）に細分した。碎片および小形剥片の大半は剥片剥離や石器製作の調整加工時に生じたものと判断される。中形剥片は縦長剥片と横長幅広剥片に区別できる。その中には二次加工ある剥片も数点ある。背面に礫面を残すものはわ



第6図 大～小形剥片

ずかであり、打面は、複剥離面打面、単剥離面打面が同程度認められる。これらは石匙や石鏃などの素材となりうるものである。大形剥片は、背面に礫面を残す単剥離面打面のもので占められ、石槍や石核の素材と形態的に共通する。また、例外的なものとして、本遺構にあたかも蓋をするかのような状態で出土した、長軸 27.7cm、厚さ 13.2cm、重量 3.5kg を計る大形剥片が 1 点ある（写真 3）。このほかに石槍の調整剥片も一定量ある。

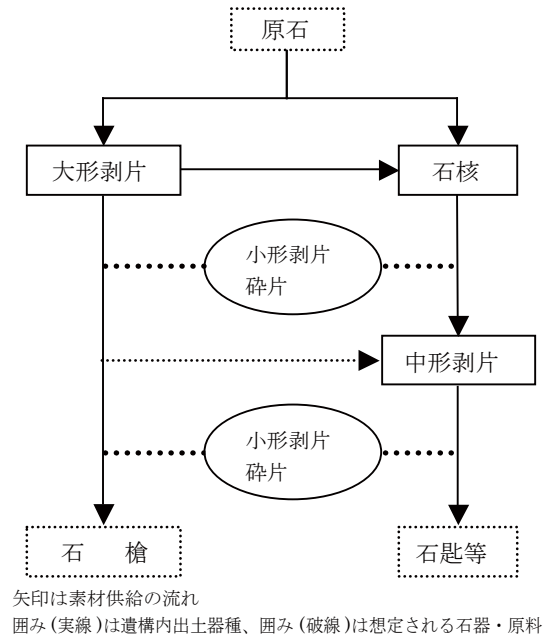
5 石器製作作業の現地性とその内容

以上のように S X 292 では、石器製作作業を示す残滓類（石核・剥片・碎片）が石器組成の中心となり、未製品や二次加工ある剥片のほかに定型的な製品はない。それでは、このような残滓類を中心とする石器組成のあり方から、一連の石器製作作業が堂の下遺跡で行われたといえるのだろうか。これらが遺構外で石器ブロックを形成していたのなら、製作作業の場と判断してよいかもしれない。しかし、土坑中である。想像力をたくましくすれば、石器の作り手は別地点での作業内容を取りあえず選別もせず

にまとめて袋などの容器に入れて運搬し、当地にて土坑を掘り、その中に一括して投げ込んだ可能性も否定できないだろう。碎片や小形剥片がまとまって出土するという事実は、厳密な選別作業を経ていないことを意味する。

こうした問題に関連して、阿部朝衛は、山形県一ノ坂遺跡や東京都もみじ山遺跡など、剥片・碎片等が集積した土坑の事例を周辺での石器製作作業の結果と推定し、そのような残滓の集積土坑を「縄文時代では、空間の使い方が管理的となり、作業の結果物が片付けられた」ものだという見方を提示している（阿部 2007）。本遺跡でも、遺構周辺から石器製作作業を示す資料が出土していることから、別地点での作業結果の持ち込み以外に、当該地でもまとまった石器製作作業が行われたといえよう。しかし、S X 292 出土石器と遺構外出土石器の比較分析は今回行えなかったため今後の検討課題としたい。

それでは S X 292 出土石器からどのような作業内容を復元することができるだろうか。ここでは 3 個体のうち、多数派の 1 個体を検討する。原石は人頭大以上の巨礫と推測されたが、こうした巨礫はもとより珪質頁岩自体、堂の下遺跡の立地する丘陵上では産出されず、丘陵麓にある段丘礫層中に由来する。産出地から巨礫のまま急勾配の丘陵上まで運ぶのは当然困難であるため、大形剥片等に打ち割られて（分割行為）、当地へ持ち込まれたと考えるのが自然であろう。大形剥片は一方で石核となり、もう一方で石槍の素材に供給されるといった、使い勝手のよい優れたブランクとなった。中形剥片は、石核からの剥片剥離、または石槍への加工途上で作出されたものであり、二次加工ある剥片として便宜的な使用に供されたほか、おそらくは石匙や石鏃などの素材剥片ともなったであろう。こうした各過程では小形剥片や碎片といった残滓もまとまって生じた。小形剥片も一部は石鏃等の石器素



第5図 石器製作作業のプロセス

材となったかもしれない。

以上が、最終的に石器製作作業の断片の集積となった石器組成から復元される作業内容である（第7図）。石器原料（大形剥片・石核等）の搬入から剥片剥離作業、二次加工までの製作作業過程が認められた。石器原料や素材、製品等は、当地での使用のほか、河岸段丘上に分布する集落へ最終的に持ち込まれたものと推測される。

6 石器集積遺構の帰属時期と性格について

（1）時期に関する問題

上岩川遺跡群でもそうであるが、本遺跡では土器資料が非常に少なく、当該遺構からの出土は皆無である。このことは遺跡・遺構の性格を考えると示唆的ではあるものの、時期決定を著しく困難なものとしている。今回の場合は石槍の未製品が時期を決める手がかりを与えてくれるだろう。本県の大形石槍の出土例は、縄文時代でも草創期と前期にほぼ限られる。草創期に確実に位置付けられるのは横手市岩瀬遺跡（秋田県教委 1991）のみであり、両面調整石器の集積遺構も検出されている。堂の下遺跡の例と違って石槍の素材は礫を中心としており、形態的には大形薄手に仕上げられている。

縄文時代前期の大形石槍は、前出の狐森遺跡、兵ヶ沢遺跡、協和上ノ山Ⅱ遺跡のほか、大館市池内遺跡（秋田県教委 1999）、能代市烏野上岱遺跡（秋田県教委 2006a）、由利本荘市龍門寺茶畑遺跡（秋田県教委 2004a）等で出土例が知られる。上岩川遺跡群でも堂の下遺跡の例と類似する石槍未製品が出土している。東北地方北部の円筒下層式土器文化圏では、大木式土器文化圏など他地域に比べて、石槍、とくに大形品が卓越することはこれまでに指摘されていることである（渡辺 1978、安斎 2007 等）。本稿では、石槍の形態的特徴や周辺遺跡との関連から石器集積遺構 S X 292 を縄文時代前期に帰属するものと考えておきたい。

（2）石器集積遺構の性格―「廃棄」か「埋納」か―

石器組成の内容から、本遺構内にはけっして選別されたものが集められたというわけではなく、むしろ、石器製作に伴う残滓が点数上、圧倒的に多い。

ところで、一般に石器集積遺構は「デポ」と呼ばれることが多い。田中英司は「デポ」について考えるにあたって、「収蔵」・「隠匿」・「供献」の3種の性格を与え、廃棄等は「デポ」から除外とした（田中 2001）。問題は本遺構が「埋納土坑」なのか「廃棄土坑」なのかである。結論から言えば、そのどちらであるかを実証的に判断することは現状では困難である。しかし、単なる廃棄土坑とした場合、説明しがたい幾つかの点がある。

一つは、その立地である。集落内に廃棄土坑が設けられるのならわかるが、集落外の、しかも狐森遺跡などの前期集落跡が分布する河岸段丘との比高差が 50 m 以上ある丘陵尾根上にわざわざ穴を掘って不要品を埋める必要があるだろうか。また、接合率の低さも単なる廃棄土坑としては疑問が残る。個体数が少なく剥片類の点数がある程度まとまっていれば、それが廃棄の結果である以上、接合率は高くなりそうなものである。中期末によく見られる剥片の「デポ遺構」では接合率が高く、たとえば、堂の下遺跡と谷を一つ挟んで南側の丘陵上にある小林遺跡（秋田県教委 2002）では、大木 9 式期の竪穴住居内で検出された石器集積ピット中から出土した石器 53 点中、28 点が接合した（接合率 53%）。まとまった石器製作作業を示すにもかかわらず接合しない理由は、選別行為を経っていない

以上、その個体からの相当数の“抜き取り行為”があったことを物語っていよう。それは累積的な持ち出しの結果を示しているように見える。廃棄の結果と言い難いまひとつの理由は、前述した蓋のように置かれた大形剥片の存在である。三角錐様を呈するその大形剥片は、あたかも目印のように三角錐の頂点が上を向くような状態で出土しており、本土坑に関わった縄文人の何らかの意図を垣間見ることができる。^{註3)}

よって、S X 292 の性格については廃棄土坑ではなく、集落外に設置された石器原料埋納土坑と考えたい。ただ、碎片や小形剥片等の残滓まで意図的に埋納されたとは考えられず、選別作業を経ずに一括埋納する行動様式（たとえば、前述のように石器製作の結果をまとめた袋などに入れて埋納する等）をうかがい知ることができる。以上から、S X 292 は石器石材が容易に採取できない丘陵上における石器原料の確保・補給を目的とした遺構と考えられる。なお、先に触れた阿部朝衛の“管理空間としての片付け”はあくまで廃棄土坑としての位置づけであり、本遺構では異なる様態を指摘できよう。

まとめ

S X 292 石器集積遺構の機能は、以上のように推測される。それでは、埋納行為の主体者についてはどのように考えられるだろうか。本遺構が個人や世帯に帰するのか、特定の一集落に帰するのか、もしくは石材採掘地を共同管理した共同体（吉川前掲）に帰するのか、当該期の資源開発戦略を考えるにあたって興味深い問題である。その問いに答える準備はなく今後の課題としたいが、出土石器は石質がさほどよくないこと、選別されるほどに管理的ではないこと等から S X 292 自体は限りなく個人や一世帯、もしくは当地での活動を共にした特定グループに帰する可能性が高いのではないかと、今のところ考えたい。^{註4)}

縄文時代前期の堂の下遺跡は、集落外の活動空間として、石器原料の持ち込みと埋納、石器製作、素材や製品の持ち出しの各行為があったと推測されたが、丘陵上における集落外活動の内容と石器埋納土坑、石材原産地との関わりについては今後明らかにしていかなければならない。いずれにせよ、当該遺跡は検出遺構が少ないものの、当時の人々の活動と立地（段丘・丘陵）との関わりを考えるにあたって看過すべきでない位置を占めている。また、先にあげた「個体数（少）－総点数（多）－接合率（低）」の相関関係については、持ち出し（抜き取り）行為の累積が一因にあると推測したが、そうであるとすれば、当土坑の役割は一回性・一時的なものではなく、当地もまた回帰的な性格を帯びた空間利用であったということになる。石器原料の確保と利用を前提とした意図的な埋納行為の背景には度重なる利用があったということになるだろう。^{註5)}その具体的な活動とは何であつたろうか。本稿では、S X 292 は原石産地を日常的な行動範囲に収め、八郎潟東岸地域段丘上の集落群に属す狩猟活動と深い関わりをもった、すなわち狩猟具の兵站等を目的とした石器埋納遺構と判断したい。

ところで、本県で縄文時代の石器集積（埋納）遺構が検出されている事例は、草創期の横手市岩瀬遺跡のほか、早期の大館市野崎遺跡（秋田県教委 2008a）、中期の三種町盤若台遺跡（秋田県教委 2001）、小林遺跡、北秋田市森吉家ノ前 A 遺跡（秋田県教委 2006b）等がある。隣県である岩手県域でも各時期を通じて同様の遺構が数多く検出されているようであり（阿部 2003）、本県における事例を集成した上での再論の必要性を強く感じる。また、集落と猟場など、遺跡種別間における製品・剥

片類の法量や形態の比較分析を進めていくことにより、埋納遺構の実態がより鮮明にみえてくるだろう。

本稿ではS X 292の報告とあわせて、「埋納行為」の意味や丘陵という土地利用の特異性についても言及した。最後は推論を重ねた形になってしまったが、小稿を足がかりとして周辺遺跡の再検討と遺跡間の関係性の把握に努め、石材資源の利用からみた本県における縄文時代前期の様相について今後さらに検討していきたい。

本稿を執筆するにあたって、宇田川浩一氏、利部修氏、小林克氏、高橋忠彦氏に有益なご指摘・ご教示をいただきました。記して感謝いたします。

【註】

- 註1) 前に触れたことと関連して、黒色土の安定的な堆積が見られない丘陵上の遺構には、自然か人為かに関わらず、地山と似通った覆土が埋積する傾向にあるため、発掘調査中の検出作業には注意を要する。
- 註2) 本稿では、二次加工ある剥片に関して、加工部位がわずかであるものが多いため剥片の分類に入れた。
- 註3) 同様な事例として、田中英司は長崎県宮下遺跡の例を挙げ、「隠匿デポ」としている。「隠匿デポ」は田中によれば、「土壙(土坑)を掘り土器内に器物を入れ、あるいは蓋をしたり礫で覆い隠すような状態で検出されるデポ」として、実用的な機能を有したものであるが、「祭祀とすればきわめて個人祭祀に近いものとなるが、それよりも必要な私物的品物を身近に携行するため」のものではないかと指摘している(田中前掲15頁)。
- 註4) 一方、上岩川遺跡群で採掘された玉髄質の良質な珪質頁岩は交易・流通ネットワーク上にのせられた可能性がある。
- 註5) 他に儀礼的行為等を想定することもできるが、積極的に議論するだけの根拠がなく、筆者の力量も不足していることから本論では具体的に検討することができなかった。

【参考文献】

- 秋田県教育委員会 1988 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ－上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第166集
- 秋田県教育委員会 1996 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XⅡ－岩瀬遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第263集
- 秋田県教育委員会 1999 『池内遺跡－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』 秋田県文化財調査報告書第282集
- 秋田県教育委員会 2000 『兵ヶ沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』 秋田県文化財調査報告書第296集
- 秋田県教育委員会 2001 『盤若台遺跡－一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る発掘調査報告書Ⅷ－』 秋田県文化財調査報告書第319集
- 秋田県教育委員会 2002 『小林遺跡Ⅰ縄文時代編－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XⅣ－』 秋田県文化財調査報告書第344集
- 秋田県教育委員会 2003 『堂の下遺跡Ⅰ旧石器時代～弥生時代篇－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XⅤ－』 秋田県文化財調査報告書第356集
- 秋田県教育委員会 2004a 『龍門寺茶畑遺跡・向山遺跡－主要地方道本荘岩城線ふるさとづくり推進事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第373集
- 秋田県教育委員会 2004b 『狐森遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XⅠ－』 秋田県文化財調査報告書第378集
- 秋田県教育委員会 2006a 『烏野上岱遺跡－一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XⅣ－』 秋田県文化財調査報告書第406集
- 秋田県教育委員会 2006b 『森吉家ノ前A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XⅧ－』 秋田県文化財調査報告書第409集
- 秋田県教育委員会 2006c 『縄手下遺跡－一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XⅦ－』 秋田県文化財調査報告書第410集
- 秋田県教育委員会 2008a 『野崎遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XⅥ－』 秋田県文化財調査報告書第429集
- 秋田県教育委員会 2008b 『鹿渡Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡・樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡－高速交通関連道路整備事業県道能代五城目線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第436集
- 阿部朝衛 2007 「石器のメンテナンス(石鏃)」『縄文時代の考古学6ものづくり 道具製作の技術と組織』小杉康他編 同

成社

阿部勝則 2003 「岩手県における縄文時代中期の剥片集中遺構について」『研究紀要』XXII (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

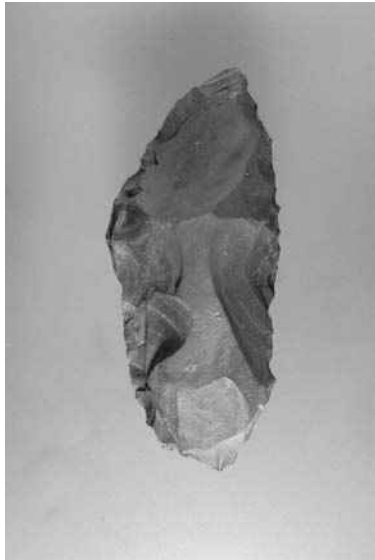
安斎正人 2007 「円筒下層式土器期の社会－縄紋時代の退役狩猟者層－」『縄紋時代の社会考古学』安斎正人・高橋龍三郎編 同成社

田中英司 2001 『日本先史時代におけるデボの研究』千葉大学考古学研究叢書1

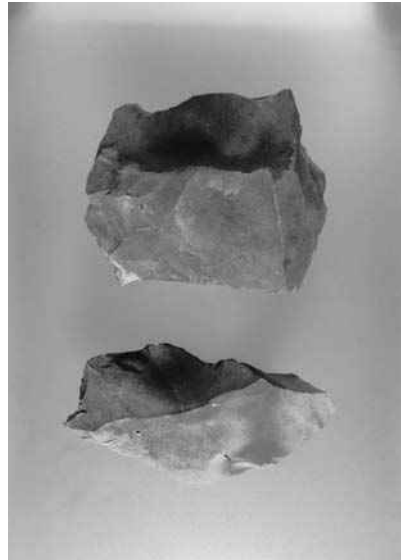
吉川耕太郎 2003 「個別別資料分析の再検討－琴丘町小林遺跡における縄文時代中期後半の石器群－」『研究紀要』第17号 秋田県埋蔵文化財センター

吉川耕太郎 2008 「東北日本における石材資源の獲得と消費」『考古学ジャーナル』No.575 ニューサイエンス社

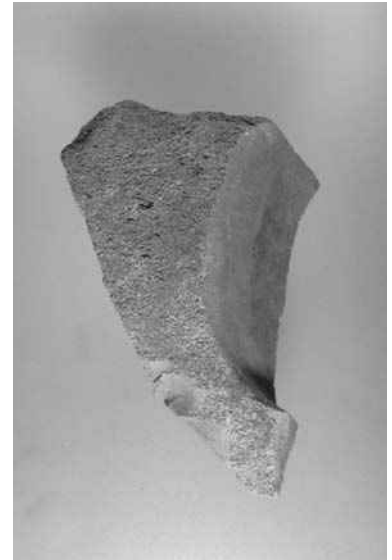
渡辺誠 1978 「東日本」『新版考古学講座3 先史文化 先土器から縄文』八幡一郎他監修 雄山閣



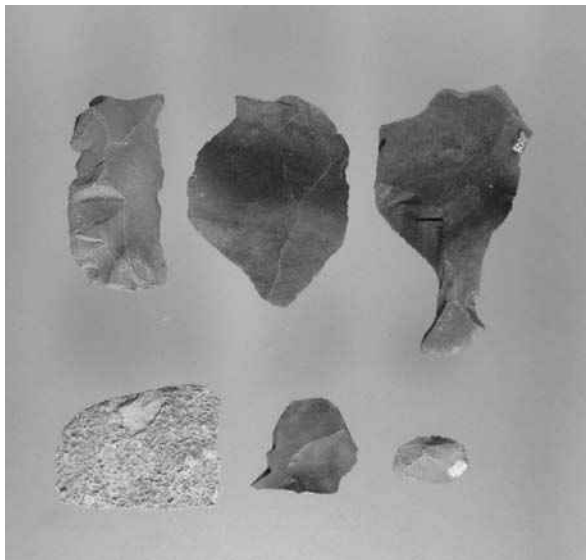
石槍（未製品）



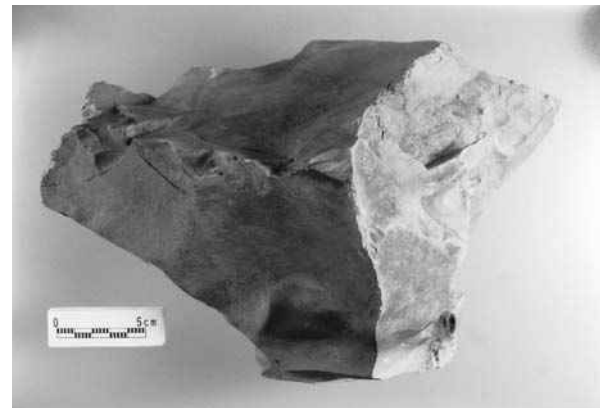
石核



大形剥片



中形・小形剥片



大形分割剥片（遺構に蓋するような状態で出土）

写真3 SX292 出土遺物